

森林公園の活性化と交流人口の増加につなげよ

(平成 25 年 9 月会議 一般質問)

平成 25 年 9 月 4 日

黒 田 英 世

町の活性化と財政の健全化に向けた取り組みは、定住人口増加促進策に加え、交流人口の増加に関しても行政として重要な課題であると考えます。

幸いにも当町の北部丘陵地から三国山にいたる総面積 **1150ha** におよぶ全国屈指の規模を誇る森林公園があります。ご存知の通り、園内にはテニスコートやフィールドアスレチック場、芝生の広場、三国山キャンプ場、炊飯広場など様々な施設のほか、広大な雑木林や、湿生植物園などもあり、四季折々の変化に富んだ里山の自然を楽しむことができます。

森林公園におけるイベントは年間を通して、M I S I Aの森プロジェクトや森林浴リレーマラソン、マコモ飛ばしなど様々なイベントが企画、実行されておりますが、この全国屈指の規模を誇る資産が津幡町にとって十分に有効活用されているとは思われません。

森林公園は石川県の資産であり、運営管理は森林公園地域振興会・金沢森林組合エコグループが行っているという実態があり、津幡町独自での施設の拡充は様々な課題があると推察します。しかしながら、ほかには無いこの全国有数の資産をより有効に利用し津幡町の活性化につなげていくべきと考えています。

そのためにはより一層魅力ある施設としなければなりません。

それには、現行施設の拡充や社会のニーズにあった新しい施設の増設などが必須であります。

そのひとつにオートキャンプ場があります。

では何故、今オートキャンプ場なのか、キャンプといえば夏の遊びで林間や海岸で1~2泊程度のレジャーと思われがちですが、今では冬をのぞく3シーズンの遊びになりつつあります。例えば近年、三国山キャンプ場でも夏以外に利用する方も増えているのではないのでしょうか。

加えて、団塊の世代が退職時期を迎え、いわゆる老後のスローライフをキャンピングカーなどで好きなときに好きなところへ行くといった生き方や若いファミリーの一部にもアウトドア派が増えてきております。

これ等の裏づけとしては毎年一度、地場産業センターで開催されるキャンピングカーの展示会場には有料であるにも係わらず、年を追うごとに来場者が増えており、今年も6月に開催されましたが、熟年夫婦や若い子ども連れの夫婦など、来場者であふれるほど盛況でありました。

そして、オートキャンプ場の利用の仕方が変わってきております。

これまでの単なる1泊や2泊をキャンプ場で過ごすというスタイルから連泊し、そこを拠点として周辺の観光やイベントに参加するといった方が多くなってきております。

例えば青森市の中心部から約10kmのところ、1年中遊べる「**FOUR-SEASONS PARK**」と名づけられた「モヤヒルズ」と言うスキー場や室内プールをはじめ、インドアテニス場など実に様々な設備を備えた大きな施設があり、その中のひとつにオートキャンプ場があります。

大変設備の良い施設でありますので四季折々に利用者が多くいます。青森の「ねぶた祭り」のときはこのキャンプ場が満杯になりますし、ここを基点に「ねぶた祭り」を観に行く、そして参加する。また、八甲田山や紅葉で有名な奥入瀬にも通じており、青森市周辺観光の拠点になっております。

例えば森林公園のオートキャンプ場を基点にして、「百万石祭り」や金沢市周辺の観光などの拠点としての機能は充分です。

津幡町以北で規模の大きいオートキャンプ場は珠洲の「りふれしゅ村鉢ヶ崎」や「能登島家族村 **We**ランド」がありますが、これ等の施設から金沢まで同様の規模の施設はありません。

また、金沢周辺には「医王の里オートキャンプ場」がありますが、いずれも森林公園の周辺環境や余暇を過ごす施設や市街地からのアクセスの良さは他とは比べようもありません。

さらに、海にも近い、町内にはいくつもの入浴施設もある、滞在中の買い物は町内で十分に用が足せるなど、このような他を寄せ付けない利便性と様々な体験や四季を感じられる周辺の環境の良さを持つ森林公園を交流人口の増加に生かすべきと考えます。

そこで、県を動かすだけのオートキャンプ場を一例とした森林公園活性化に向けた津幡町の熱意と思いを青写真にし、県に対して要望していくべきと考えます。こうした森林公園活性化に対する積極的な活動は県にとっても重要な関心事だとも考えております。

これ等について矢田町長のお考えをお聞きしたい。

県水受水タンクの耐震性について

(平成 25 年 9 月会議 一般質問)

平成 25 年 9 月 4 日

黒 田 英 世

去る、6 月会議で農業用ため池の耐震性に関して質問させていただきました。津幡町には農水省が改修を促進すると決めた大型の農業用ため池は存在しないことと石川県が独自に定めた基準により 25 年度から 26 年度にかけて耐震性の調査をするとの答弁をいただきました。

農水省が 2000 年にまとめた現行の指針は一定の耐震性の確保を求めています。発生頻度の低い巨大地震は想定しておらず、東日本大震災では幾つかの被害を出したことを受けて、今年、見直しされる新指針では震度 6 弱以上の地震にも耐えられることを基準としています。

そこで津幡町は 1 日に約 11,000 m³ の上水を個別給水しています。このうち約三分の一の約 4,000 m³ を津幡町浄水場で処理した自己水で、残りの約三分の二の約 7,000 m³ を石川県鶴来浄水場から供給を受けまかなっております。

これ等の県水の受け口として庄地区、太田地区の 2 ケ所に合わせて 5,000 トンの受水タンクがありますが、それぞれ下方には住宅があり万が一のときは人的、物的被害が避けられないことが想定されます。これ等 2 ケ所の受水タンクの耐震性はいかほど担保されているか八田上下水道課長にお尋ねします。

特定図書の閲覧制限について

(平成 25 年 9 月会議 一般質問)

平成 25 年 9 月 4 日

黒 田 英 世

昨年、12月に島根県松江市の教育委員会が「はだしのゲン」について松江市立の小中学校の図書館から作品を自由に閲覧できないように「閉架」という処置を取ったことにより、市民はもとより全国から多くの賛否両論を含む多くの意見が教育委員会に寄せられておりました。

原作は作者の中沢啓二氏による、自身の原爆の被爆体験をもとにした漫画であり、戦中戦後の激動の時代を必死に生き抜こうとする主人公「中岡ゲン」の姿が描かれています。同漫画をもとにして実写映画やアニメ映画・テレビドラマも製作されています。

更に、18カ国語に翻訳され出版され、それぞれの国でも広く読まれております。

「はだしのゲン」は私も読ませていただきました。目を背けたくなるような表現や描写は少なからずありますが、自らの体験を通して核兵器の恐怖や戦争の悲惨さを訴えており、核兵器の廃絶や反戦を読者に切実に訴える内容だと受け止めております。

今回の問題は8月26日に松江市の教育委員会が昨年12月16日以前の状態に戻すということで一応の結論が出たようですが、これまでの過程において教育委員会の対応のまずさに加え、一地方都市の教育委員会の行いについて文部科学大臣が記者会見で談話を発表するなど首を傾げたくなる事象もありましたが、これ等の背景などに一切関係なく純粋に児童教育といった立場から見た「はだしのゲン」について津幡町の教育委員会としてはどのように捉えられているか早川教育長に見解をお尋ねします。